

■エッセイ

東南アジア博物館事情

副館長 佐々木 勝

■博物館展示品読解ガイド

東南アジア諸国には、一般に想像するよりはるかに多くの博物館が存在しています。設置者は国である場合がほとんどで、例えばタイでは、地方のどんな小さな街であっても国立の博物館を目にすることができます。博物館の多くは、さしたる情報もなく、計画的に出向く術はないのですが、たまたま立ち寄った街で、この博物館を発見したときは、多少無理してでも訪れるようにしています。

こうして図らずも出会うことになった博物館の中には、タイ・ビルマ・ラオス3国の国境が交わる地にあるアヘン博物館、ラオスのサヴァナケートにある恐竜博物館、ボルポト政権下で粛清の舞台となったトゥール・スレン博物館など、小さくともまた行きたいと思えるような、印象に残る博物館がいくつもありました。

東南アジア諸国では、およそ観光スポットとは思えない小規模な博物館でも、展示品の解説は、それぞれの母語に加え、英語か仏語で併記するのが当り前のことでした。これは街の道路標識など、さまざまな面でも同様で、東南アジア諸国は、ひと昔も前から、外国人の眼を意識した国際化先進国であったと言えるかもしれません。

しかし、この解説文自体はなかなかの曲者で、帯のコピーに「日常生活では絶対困らない」と書かれた厚い辞書を開いても、解説文にある単語が見つからない、といったケースが頻繁に起こるのです。

日本の博物館でも、特殊な専門用語が並び、読者不在と揶揄された時期もありましたが、今では、平易な解説の重要性が叫ばれ、わかりやすさは絶対の条件であるとされています。実は、このわかりやすい解説文は、どの国の博物館にもあてはまる普遍の条件であると考えていたのです。

ところが、2年前、ある国の国立博物館で、案内してくれた学芸員に、この難解な

解説文を話題にしたところ、思いがけない答えが返ってきました。彼の返答は、「博物館は、国の優れた面、国民の秀でた面を知らしめるための施設であって、外国人、とりわけ欧米人には、我が国の優秀性を強調するよう指導されている」というもので、外国語の解説文は「教養ある文章、格調高い文体が優先され、わかりやすさは議論にもならない」と言うのです。

言われてみれば、思い当たる点は少なからずありました。この博物館は、隣国との国境に接して建てられているのですが、館内の展示解説によれば、この隣国との戦争は負け知らずで、ある超大国の軍事介入も、圧倒的な民衆の力で完膚無きまでに粉砕したことになります。しかも、展示スペースのかなりの部分が、新旧政権指導者の顕彰の場となっているのです。

この国は、世界に先駆けて「人権」の概念を確立させ、「自由・平等」を謳った西洋の一国によって、植民地にされるという皮肉な運命をたどるのですが、この西洋なるものへの反発が、自国の優位性の強調という展示スタイルに、反転的に表現されていると感じたものでした。

総じて東南アジアの博物館では、自国の考え方と西洋の文化とが、衝突しているように見えてくるのです。そして、「西洋化」の優等生と言われた日本が、植民地解放をスローガンに、東南アジアで行ってきた行為にも、新たな展示を仕向け、ノーを突き付ける日がやってくるのかもしれません。

■消極的博物館活用ガイド

カンボジアで激しい内戦が続いていた、かなり前のことになりましたが、プノンペンの国立博物館を訪れたことがありました。情勢が情勢だけに、観光客などいるはずがないと思っていた私は、訪問当日の来館者名簿に3人もの日本人を発見し、ひどく驚いたものでした。今でこそ、バンコクなど東南アジアの都市には、目的もなく、ただ



国立博物館（プノンペン）

漠然と逗留している日本人が数多く見られます。彼らのほとんどは若者ですが、「外こもり」という造語が生まれ、日本社会を映す現代病として論議の対象にされるほど、数の面でも無視できなくなっているのです。

しかし、「外こもり」は今に始まった事柄ではありません。昔、プノンペンの国立博物館で出会った若者も、そういう人たちがした。日本には戻りたくないと言え、クメール文化を学ぶ証として、週1回博物館に通いつけていると言うのです。留学であると外聞を繕った、その方便として、博物館が利用されていたのです。

日本社会が息苦しくなってきたのは、一体何故なのでしょう。この閉塞感はおそらく日本だけのものではなく、「近代化」を成し遂げた先進国一般の、今の姿をそのまま映し出しているのかもしれない。

その一方で、先進国では不可欠な、勤勉性とか協調性の有無を不問にし、ブラブラ逗留も違和感なく受け入れる、懐の深い東南アジアの国々にも、この「近代化」に向かって邁進しているのです。

小田実などが説くように、「西洋化」とは異なる「近代化」が存在し、世の潮流になり得るとしたならば、その成り行きを観測する定点は、「東洋」に置くべきで、決して大英博物館やルーヴル美術館ではないはず。これが、今、東南アジアを訪れる獲とした動機付けになっているのです。

とは言え、小さな博物館の片隅で、空想に酔いながら捻りだされた結論は、あまりにも当然すぎるものでした。

《東南アジアの未来は相当に複雑だ》

■活動レポート

■学芸員室より 岩手の珍鳥

藤井 忠志 (学芸第三課長)

これまでに本県への渡来例がない、または少ないというのが珍鳥ですが、実は珍鳥の定義はあいまいです。私の場合は、文一総合出版から出ている「日本の鳥550」(2000) 図鑑や日本鳥類目録改訂第6版(日本鳥学会 2006)を参考に、現在まで10例以下しか記録がない種や出現頻度が著しく少ない種を珍鳥という扱いにしています。

珍鳥が出現するたびにマスコミから問い合わせがあります。その都度、いちいち調べるのがとても煩わしく、県立博物館としての立場からいい加減なコメントもできないこと、さらに昨年度開催された「岩手の鳥っこ」展を契機に、思い切って岩手県産珍鳥詳細記録を作成することにしました。

県内の珍鳥情報を至るところから集め

るには、かなりのエネルギーが必要でした。なかには信憑性が疑わしいものもあります。しかし、1種1種リストが増えるたびに、充実感も増しました。

この情報はいまだに公にはなっていませんが、今年度発行予定の岩手県立博物館研究報告第25号に掲載すべく、現在、編集作業中です。

珍鳥を巡っては、ここ数年、驚くべき種が続々と岩手県に渡来しています。近絶滅種として世界的にも希少なソデグロヅル幼鳥が雫石町に渡来(成鳥は今年、宮古市に飛来)したことや、日本において野生下では既に絶滅したコウノトリが大船渡市盛川に渡来したことなど、枚挙にいとまがありません。それらの中で、2007年1月に、陸前高田市気仙地区・矢作川にクビワキンクロ *Aythya collaris* という珍しいカモが渡来したのです。

第1発見者は、雫石町在住のアマチュア野鳥カメラマンの四ツ家孝司氏です。こ

のカモは、北アメリカの中央部と東北部の一部で繁殖し、冬期は北アメリカの東部・西部および中央アメリカの北部や西インド諸島に渡ります。日本ではこれまで5地域13例の渡来例しかなく、本県の記録は6地域14例目となったのです。

地元・陸前高田市「海と貝のミュージアム」の協力を得て、本種が飛去する5月まで109日間、連続観察を行いました。その結果、サケの幼魚を食べるという新たな食性までが判明し、この報告は2名の査読を経て日本鳥学会誌 Vol. 56(2)に「クビワキンクロ *Aythya collaris* の岩手県初記録」として掲載されました。



クビワキンクロの雌 (2007.02.02)

■解説員室より 疑問をもったときには

阿部 麻衣子 (解説員)

初めまして。昨年10月から、新たに解説員として加わりました阿部です。よろしくお願ひします。

今まで何度も足を運んでいた場所で働くというのは、知っていたつもり博物館という場所をより知ることのできる驚き・発見の続く新鮮な日々です。

例えば、今まで幾度となく見てきた展示物の1つ1つの背景にあるエピソードや歴史を研修の中で知っていくことで、見慣れたはずの、視線をただそちらへとやるだけで通り過ぎていた資料がとても興味深く魅力的なものへと変わって、そこからまた他の資料へと「何だろう?」と言う好奇心を向けて、積極的に見ていくようになりました。

そして、かつて自分で館内を観覧していた際には、見慣れないものの連続で心に余裕が無かったこともあります。それほど意識して見ていなかった展示の構成やテーマ、ストーリーなどを常設展示解説を学んでいく上で知ることができ、さらに博物館という場所を面白く感じるようになりました。

「これはどういう物なんだろう?」

「これはどうしてここにあるんだろう?」

など、頭に「?」が浮かんだらその時がチャンスです。その、「何だろう?」という疑問が消えないうちにぜひ、近くにいる私たち解説員にお声をおかけ下さい。

1人で、または仲間と一緒に展示物に見入ったり、思いを巡らせたり、または考えを話し合ったりするのも博物館の楽しみ方ですが、たまには展示物やパネルを見て浮かんだ「?」を私たち解説員にお聞かせ下さい。そして、その展示物にまつわる話に



耳を傾けていきませんか?

現時点ではそうなるようにと祈るばかりではありませんが、私も、この「博物館だより」が皆さんのお手元へと渡る頃に、晴れて「研修中」の名札が取れ、解説員として皆さんが博物館で過ごすひとときをより楽しい、より充実したものにするべく奮闘していることと思います。

見ただけではちょっと分からない展示資料の持つ歴史やその背景を知ること、さらに博物館という場所に興味を持つてると思っています。どうぞ、博物館での「?」を持ち帰る前に私たちに分けて下さい。